

「社僧」再考

— 中世祇園社における門閥形成 —

野地 秀俊

〔抄録〕

これまで、社僧という言葉は『神社にいる僧』の総称^①として何気なく使われてきた。ところが、「社家記録」をはじめとする祇園社関係史料から、「社僧」と呼ばれる僧を抽出し、整理すると、南北朝期から室町初期にかけての祇園社において、「社僧」は特定の階層の僧を指す言葉であることが判明した。祇園社の「社僧」は、執行となる紀氏一族や下級の僧である専当・宮仕の間に位置し、公文所の役人としてや仏事の主要な構成員として活動した。また、それぞれが独立した経営体でありながら、「社」

という惣的結合で評定を開くといったように、極めて寺院の「寺家」に似た存在であった。しかし、紀氏一族はこうした「社僧」を、門弟という形で自らの門閥に組み入れ、公私の別なく社務や仏事を遂行できる構造を作り上げた。そして、所領や組織の一元化がなった時、自らを祇園社の代表たる「社家」と称するようになったのである。

キーワード 祇園社、社僧、社家、門閥、公私

はじめに

これまでの祇園社研究によって、祇園祭に始まり、末社なども含めた多様な信仰や、犬神人など通じて身分制の問題や山門との関わりな

ど、祇園社が、宗教的、社会的、政治的に京都という都市において重要な位置を占めていたことが明らかにされてきた。しかし、その基礎となる社内組織の研究に関しては、小杉達氏の「祇園社の社僧」が唯一のものと言わざるを得ない状況にある^②。

そこで、今一度小杉氏の論考を振り返ってみると、小杉氏は、まず祇園社の成員を、基本的に、社僧とその下に位置する神人（社人）、そして更に下の犬神人等の三つに分類した。その上で、特に社僧は、執行以下、大小別当、三綱（上座・都維那・寺主）等になる「上級社僧」（小杉氏の造語と思われる）と、坊人と呼ばれ、承仕、宮仕、寄方、勾当、専当である「下級社僧」に分かれ、祇園社の中心をなしていたとしたのである。こうした分類は、『八坂神社文書』（以下、『文書』と略す）の目次が、社僧の中に別当、目代といった延暦寺（特に門跡）系の僧侶が補任される上部機構のものも含んでいることを考えると、社僧の定義が小杉氏によってより実証的に整理されたと評価できるであろう。しかし、小杉氏の論考を読む限り、社僧を《神社にいる僧》の総称》として認識した上で祇園社の正員の分類を行なっているようにも取れ、その実証性にも多少の疑問が残る。例えば、『祇園社の社僧の実態を中世に限つてではあるが考察』するとしつつ、近世の史料に出てくる社僧を取り上げていたり、中世の史料を使った考察においても、史料の中で「社僧」と呼ばれている僧と呼ばれていない僧を混同して把握しており精細さを欠いていると言わざるを得ない。「社僧」という言葉を大切にするのであれば、まず史料中でのどのような僧が「社僧」と呼ばれているのかを把握し、それから「社僧」の実態の分析に入るのが妥当な方法と言えよう。

そこで本論文では、「社僧」という言葉にこだわる立場から、発表以来支持されてきた小杉氏の「祇園社の社僧」の再検討をしたいと思う。史料としては、小杉氏と同じように『八坂神社記録』（以下、『記

録』と略す）や『文書』などに掲載の史料を中心に使用することとし、その都合上、時代も南北朝期から室町初期と限定されたものとなる。しかし、結論的にいうと、この時期の「社僧」は紀氏一族の台頭とともに、他社と比較しても独特の存在形態をなしていたのである。その変容を追うことによって祇園社内組織の特質を明らかに出来ると考えている。従って、本論では祇園社の社内組織全体を見渡すというより、「社僧」の再考と紀氏一族の台頭の様子の説明を主な課題としたい。

1 「社僧」と呼ばれる僧

それでは、「はじめに」でも述べたように、まず「社僧」と呼ばれる僧の抽出から始める。『記録』や『文書』の記事の中に、例えば、「社僧式部権大別当元怡」⁶⁾のようにはつきりと「社僧」と書かれている僧の名を表にしたのが表1である。一見して明らかのように、そこには「世家記録」の筆者である顕詮はもちろん、その子息の顕深や顕詮のライバル顕増や静晴など、執行になったことのある者や執行になり得る者、つまり紀氏一族の者の名前は一切出てこない（図1の系図参照）⁸⁾。

また、小杉氏が「下級社僧」として定義していた坊人についても同様のことが言える。坊人については、別の機会に考察したいと考えているので、本論文では必要最低限の説明だけをするに止めたい。小杉氏は坊人を承仕、宮仕、寄方、勾当、専当であると整理したが、坊人

とは、本来宮仕等が紀氏一族に私的に従属した場合の呼称であって、何かの役職名でもなく、身分を表わすものでもない。従って、坊人という言葉は宮仕等の階層を指すものとしては適当でないと考える。そこで小杉氏の整理した坊人を見てみると、実は専当、勾当、承仕はほぼ同一の者がなっており、多くは「坊人専当」と出てくる^⑨。また、寄方は下坂氏によって、「祇園社支配の町や神人集団を統制するために任じられた特定の勾当・宮仕のこと」と説明されている^⑩。つまり、坊人になり得る者は大きく分ければ専当（承仕、勾当）と宮仕であると言え、この階層を専当・宮仕と呼ぶこととしたい。そうした上でこの階層にどのような者がいたのかを見ると、例えば「社家記録」貞和六年正月一日条で、専当では正珍、朝円、正禪、朝珍などが、宮仕では大善、乙熊、幸松、孫法師、乙夜叉などが出てくる。しかし、これを表1と照らし合せてみても、やはり彼らは決して「社僧」とは呼ばれていないのである。つまりこのことから、この時期の「社僧」は、小杉氏の言うような執行や坊人（専当・宮仕）を含んだ祇園社全体の僧を指しているとは言えず、ある限られた僧のことであることがわかるであろう。

また、この表からは次のような「社僧」独特の特徴も見出すことができ、それらを分析することによって、より一層、「社僧」が限定された集団であることが明らかとなる。

- 1、多くの僧に国名が付いている。
- 2、三綱や権別当・権大別当・少別当になる。（長吏・執行・大別当にはならない。）

3、極位が法眼。

4、公文（一一七）になる。

5、阿闍梨位を持つ。

6、坊を営み、世襲する。

まず、1についてだが、僧の通称に関しては、富田正弘氏が東寺の上級僧（学侶クラス）と下級僧（堂衆クラス）の通称の違いによって両者の階層の差異を説いており、上級僧は官途名、下級僧は国名・仮名を名乗っていたとしている^⑪。しかし、「社僧」の中には「大進」、「大輔」、「治部」などの官途名が付いている者もいて、紀氏一族が「助」（顕詮）、「宰相」（顕深）、「兵部」（顕増）と名乗るのと共通している^⑫。こうした例外について、今ははっきりとした答えを出すことが出来ないが、とりあえずここでは、紀氏一族には国名を名乗るものが居らず、国名を名乗っていることが「社僧」である指標になり得ることを指摘しておく。

階層の差異という問題でいえば、2、3の特徴である役名や僧位にそれがよりはいきりと表われている。

⑬ 注進 僧名事

権長吏法印大和尚位	隆晴
大别当法印大和尚位	静晴
社僧 執行権少僧都	顕深
大别当法眼和尚位	顕賀
大别当権律師	幸晴

大別当権律師	晴慶
大別当権律師	有晴
大別当大法師	顕豪
権上座法橋上人位	円秀
権上座法橋上人位	快賢
権別当阿闍梨大法師	定栄
権別当大法師	能禪
寺主大法師	詮秀
権寺主大法師	兼恵
都維那大法師	快深
権大別当阿闍梨大法師	晴嚴
権大別当大法師	玄応
権大別当大法師	祐深
権大別当大法師	幸秀
権大別当大法師	苅慶
権大別当大法師	幸舜
少別当阿闍梨大法師	慶増
少別当阿闍梨大法師	円智
少別当法師	元秀
少別当法師	快増
右注進如レ件	

永和三年五月 日

まずここで指摘しておきたいのは僧の序列である。その基準として優先されているのが僧位僧官ではなく、権上座などの三綱も含めた、権長吏、大別当、権別当などの役名によっていることが、顕豪が「大法師」であるのに「法橋上人位」である円秀の前に記されていることから判るであろう。この役名というのは、三綱を含んでいることを考えると祇園社政所に関係したものとも思われるがはっきりしたことは判らない。ただ、僧位僧官のように社外でも通用するものではなく、祇園社内における序列を表わすものと思われる。そしてその順序はこの史料から簡略化すると、長吏―社務執行―大別当―上座―権別当―寺主―都維那―権大別当―少別当ということになる。

次に史料に出ている僧を調べてみると、まず、初めの隆晴から顕豪までが紀氏一族として確認できる者たちである。⁽¹⁾それ以降には紀氏一族の者は居らず、快賢、定栄、能禪など「社僧」と呼ばれる僧が散見する。従って後者の者たちは「社僧」と考えることができるであろう。つまり、紀氏一族と「社僧」は顕豪と円秀の間で分れているのである。そして両者の違いは、この史料と表1を合せて見ると一層はつきりとしてくる。それは、紀氏一族の役名が権長吏・社務執行・大別当であるのに対し、「社僧」はせいぜい上座（権上座）や権別当ぐらいまでしかなく、決して大別当等には昇格できなかったのである。それは僧位においても言え、紀氏一族の極位は法印であるが、「社僧」は法眼までしかなくかつたのである。ちなみに、専当・宮仕は法橋が極位であつた。「社僧」は、紀氏一族とも専当・宮仕とも、僧として階層的に一線を画されていたのである。

しかし、その限られた僧というのがすべて「社僧」というように言えるのだろうか。「社僧」でも紀氏一族でも専当・宮仕でもない僧は存在しないのだろうか。「社僧」は、小杉氏も紹介されているように、所領の混乱や刃傷沙汰に及んだりすると「解¹⁵却社僧之号¹⁶」や「永可¹⁶被¹⁶放¹⁶社僧¹⁶」という形で処分にあう。それは単に「社僧」の称号を剥奪されるだけではなかった。例えば、「永可¹⁶被¹⁶放¹⁶社僧¹⁶」とされた「社僧」快祐は、いつのまにか「令¹⁷還住¹⁷」めていたという。つまり、快祐は「社僧」を召し放たれたことによって、祇園社を追放させられていたのである。また、「元社僧」と呼ばれた幸円が、父親である幸兼の住坊に放火するという事件が起きているが、その理由として父から住坊を譲ってもらえないことを挙げている。そのことを考えると、「社僧」を召し放たれるということは、社内からの追放に留まらず私的な相続権まで剥奪されることなのであり、自らのアイデンティティを消失させられる行為なのである。つまり、紀氏一族と専当・宮仕以外の僧で「社僧」ではない者の存在は考えられないといえるのである。

2 「社僧」の活動

前章によって、「社僧」が紀氏一族と専当・宮仕の間に位置する僧であることが明らかとなった。では、実際に「社僧」は祇園社の正員としてどのような役割を果たし、活動していたのだろうか。「社僧」の役割、活動については、小杉氏の説明と重複する部分もあるだろう

が、私と小杉氏の「社僧」の捉え方は異なっているのであり、あなたが重複する事例を取り上げることとも無駄ではないと考える。よって、「社僧」の特徴として挙げた4・5についての説明も兼ねてその活動を追ってみたいと思う。

次の史料は、顕詮が執行をしていた正平七年正月に公文所の役人である公文を治定した時のものである。

一¹⁹末公文今日治定□□□□□□□□得分可²⁰相計²¹之由、自²²一公文許²³一申之間、於²⁴二公文一者、自²⁵元無²⁶相違²⁷、二公文治部都維那仙舜、三公文権大別当玄覺、是又吉書時治定了、
四²⁸御阿闍梨²⁹ 筑前少別³⁰ 幸岐房³¹ 駿川房³² 左衛門³³ 常朝秀³⁴ 六³⁵ 左衛門³⁶ 幸快³⁷ 可³⁸レ為³⁹二此儀⁴⁰一之由返事了、是皆門弟也、此外長門房者依⁴¹レ為⁴²二重服⁴³一、不⁴⁴レ及⁴⁵レ召⁴⁶二加之一、

公文所の役人は一から七公文までおり、末公文とはその内でも二、七公文までを指す。一公文は本来執行が兼任するものであったが、次第に代官が置かれるようになり、一公文代、もしくはそのまま一公文と呼ばれていた。ここには一公文の名前が記されていないが、他の記事から三河法眼顯聖という僧で執行代も兼ねていたことが判る²²。そしてここで注目したいのは、二公文である仙舜や四公文の晴巖は表1を見てもらえば判るように「社僧」と確認できる者であり、他の者たちも国名を名乗っていることやその役名から「社僧」だと考えられることである。これは、特徴の内の4にあたる。

公文のなかでも特に一から三公文は政所下文に別当・社務執行と共

に署名をし、祇園祭の時の馬上役の得点を配給されたり、別当吉書にも立ち合うなどしている。⁽²⁵⁾ また、他の末公文は納所として祇園社領の年貢の収納に関わり、「感神院政所返抄」という年貢を受け取った時に出す文書などを発給している。⁽²⁶⁾ つまり、公文は公文所の役人として政所の政務の中核を担っており、それに「社僧」がなっていたのである。祇園社における公的な実務役人としての「社僧」が浮び上がってくるであろう。

また、さらに注目しなければならないのは、ここに出てくる「社僧」が、執行顯詮の「是皆門弟」であるということである。門弟は、静晴には静晴の門弟がいること考えても、紀氏一族の各坊が「社僧」を門弟として従属させていたと思われるが、それが師資関係によるものなのかはつきりしない。ただ、この例のように、紀氏一族が自らが執行になった時にはその門弟を要職に配置していたことは明らかであり、「社僧」の門弟化が派閥を生みだし、その派閥によって祇園社が運営されていくという構造になっていたと言える。そして、こうした構造は、祇園社で修せられる仏事においても見られることであつた。

そこで次に、「社僧」の僧としての活動、つまり仏事⁽²⁸⁾に関して「社僧」はどのような役割を果たしたかを概観する。これは、「社僧」の特徴の5、つまり、「社僧」が阿闍梨位を持つということにも関わる活動と言えるだろう。阿闍梨位とは、本来密教の伝法灌頂を受けた僧に与えられるものだが、「社僧」が伝法灌頂を受けた記録は残っておらず、当然、紀氏一族からの付法も見られない。というより、不思議と

紀氏一族の中に阿闍梨位を持つているものはいないのである。従つて、阿闍梨位がどれだけ実質的な意味を持っていたかは疑問が残るが、次の史料を見てもわかるように、「社僧」が、法会の中核をなしていたことは確かである。

一安居始行如レ例、夏衆今日十一人、近年八日衆^(大略六七人也)今年人數多也、殊勝々々、

結番次第

相模 ^亥 法橋乗秀	安藝 ^卯 阿闍梨定譽	大進 ^辰 權別當親尊
上野 ^巳 阿闍梨円朝	治部 ^午 都維那仙舜	但馬 ^未 都維那円秀
大和 ^申 權大別當幸深	和泉 ^酉 阿闍梨玄覺	輔阿 ^戌 闍梨幸譽
伯耆 ^亥 少別當慶増	壹岐 ^子 房玄應	

四月廿六日 依所衆退出

夏安居は本来、四月一五日から七月一五日まで堂に籠り經典を講読する、僧にとつては重要な行だが、祇園社では四月八日から始められていたようである。その時、夏衆として参籠するのが「社僧」であつた。特に、「八日衆」と呼ばれる夏安居初日の結番は「社僧」で占められていたことがこの記事によつて判る。その後七月一五日までの毎日の結番には紀氏一族の者も加わるが、「社僧」が夏安居の主要な構成員だったことには変わらないであろう。その他にも、「社僧」が参勤する仏事として、常行堂における恒例の念仏三昧⁽³⁰⁾などがあり、祇園社の年中の恒例仏事は主に「社僧」によつて担われていたといえるのである。

また、天下泰平の祈願という、臨時の仏事においても「社僧」は主要な構成員として活動していた。

為⁽³²⁾天下泰平社頭安穩一、一社百座仁王講經^{經百座}、出廻文一、自⁽³³⁾今日一始行、自⁽³⁴⁾公方一無^難被^難仰事一、別而自⁽³⁵⁾社家一沙汰了、

社頭鳥居去廿二日顛倒、為⁽³⁶⁾祈禱一以二門弟十一人一、自⁽³⁷⁾昨日一毎日三部三座三日間、仁王經至⁽³⁸⁾于今日一三ヶ日転読了、廻請 毎日三部三座仁王般若經講読事

三川法眼御房奉

信乃法眼、奉

大進権別当、奉

下野権別当、奉

治部都維那、奉

長門権大別当、奉

和泉阿闍梨、奉

卿権大別当、奉

筑前少別当、奉

壱岐

駿川奉

右為⁽³⁹⁾天下静謐社頭安穩一、自⁽⁴⁰⁾今日一^{廿四日}到⁽⁴¹⁾于来廿六日三ヶ日之間、各三部經致⁽⁴²⁾二丹誠一、可⁽⁴³⁾レ被⁽⁴⁴⁾二講読一之状如⁽⁴⁵⁾レ件

文和元年十一月廿四日

三月一八日条は足利義詮が南朝軍を攻めに行く時に、一月二六日条は社頭の鳥居が倒れた時に、いずれも天下泰平（静謐）・社頭安穩

を祈願して仁王經を講じた法会なのだが、先にも述べたように、そこで「一社」や門弟の「社僧」が講衆として主要な位置を占めていたことがここからもわかる。そして、三月一八日条では公方（義詮）の命は下っていないが、こうした天下泰平の祈禱は、一見、祇園社全体に関わるもののように思われるが、本来將軍や天皇（上皇）から御師に対して依頼されるものであった⁽⁴⁶⁾。従って、將軍等からの依頼はなかったが、この二つの法会においても顕詮は御師としての職務を果たしたと考えられるのである。そして、顕詮はここでも「社僧」を門弟として動員している。つまり、紀氏一族は仏事に際しても自らの門弟を配し、仏事を遂行しており、自分の御師としての活動の時さえ「社僧」を使っていたのである。前の公文の件と合わせて、これらのことから、組織において紀氏一族の門閥化が進んでいたと言えるのである。この問題に関しては4章で言及することとして、ここでは「社僧」が公文所の役人として、また、恒例の仏事を遂行する主体として公的な役割を担っていたことが明らかになったと思う。

3 「一社」としての「社僧」

「社僧」の性格や役割はある程度解明されてきたが、彼らの存在形態はどのようなものであったのだろうか。

「社僧」は、漠然とした集団であったのではなく、それぞれが個別の経営体として成り立つ存在であった。例えば、小杉氏も例として出していた角坊定朝は、「自⁽⁴⁷⁾故萱殿一⁽⁴⁸⁾代々為⁽⁴⁹⁾御師職⁽⁵⁰⁾」て摂津国金心

寺を寄進されている。この所領は、名目上は祇園社に寄進されたことになっているが、決して祇園社に寄進されたのではなく、御師たる定朝個人に寄進され、弟子の定栄に譲られることとなるのである。³⁷ 結果的にこの金心寺は定栄の弟子である深栄の代に足利義満によって顕深の所領とされてしまうのだが、これによって、「社僧」が自坊を構え、自らの宗教活動によって得た私領を持ち、それらを世襲して伝えていったことがわかるであろう（「社僧」だけのことではないが6の特徴）。また、こうした「社僧」の独立性によって、彼らの行動は、時として祇園社という枠を越える場合もあった。

³⁸ 一夏衆丹後法眼快恵、就坂本仰木庄事、可レ有合戦之間、座主青蓮院御門徒円明房憲慶相語之間、即尅越坂本、仍自昨日不レ参供花、將又舍弟越中都維那快賢同為夏衆之處、同道舍弟之間、不□□□□□□所要退出、安堵例會無先蹤一歟、自由至希代珍事、神慮難レ測哉

応安四年七月一日、近江国仰木庄をめぐって青蓮院の門徒と妙法院の門徒が合戦に及んだ。その中心は室町幕府の山門使節にもなっていた山徒の争いであるが、そこに「社僧」である快恵や快賢も関わっていたのである。夏衆であったはずの両者は、合戦に参加するため坂本へ行ってしまい途中から夏安居に結番しなくなってしまったのである。「社僧」はこうした武力をも持ち合せていたとも言えることができるが、何よりも、それぞれが自分の論理で独自の活動をする存在で

あったことを指摘しておきたい。

しかし、それは「社僧」が自由勝手な振舞いを常としていたことを意味するのではない。「社僧」は、寺僧の如く和合の精神とそれを具現する場所を持つ存在でもあった。

正平七年閏二月にいわゆる「正平一統」が破綻すると、足利義詮は男山八幡に陣取る南朝軍を攻め、その撃退に成功する。次の史料は、同年四月四日、義詮が帰洛し東山の佐々木道譽の宿所に軍勢を移した時のものである。

一八幡有落居一者、鎌倉殿可レ有判官入道宿所高橋一之由、有^{可レ}其沙汰一歟之間、軍勢等稱^{可レ}寄宿社僧坊一、各札打之、安居精進最中、觸穢可レ為難治一之間、可レ被レ停止寄宿一之由、令^{可レ}烈参武家一可レ申之由、社僧等今日於後戸一評定、申^{可レ}社家一之間、不^{可レ}可^{可レ}有^{可レ}三子細一之由返答了、但烈参可^{可レ}有^{可レ}斟酌一歟之由、内々於此房中^{可レ}有^{可レ}評定一、

義詮と共に東山へ来た軍勢が、「社僧」の坊に寄宿するという札を立て始めた。夏安居の潔斎中なのに合戦で穢れた（というより普段の武士自体が穢れたものと見做されていたと思われるが）者に来られては困ると、「社僧」は本殿の後戸で評定を開き、寄宿を止めてもらうよう烈参して申し入れに行くことを決めた。しかし、烈参は社家（執行）により遠慮するように言われている。この評定は翌日五日にも行なわれ、

一社僧坊軍勢寄宿之事、執行代等於二後戸一評定、烈參不レ可レ然歟、重一味儀令二治定一後、内々可レ伺歟之由落居云々、

一人も抜け駆けして武家を寄宿させるようなことなく一致団結する旨を確認し、烈参はせず内々に申し入れるということで落ち着いた、ということである。

ここで注目したいのは、「社僧」がその意志決定のために評定を開くということである。この評定には、社内の物が盗まれる等問題が祇園社全体に関わる場合には、執行が列参することもあるが、基本的には「社僧」のみで開かれる評定であった。また、評定の行なわれる後戸という空間は夏堂とも呼ばれ、夏安居を行なう所であり、「社僧」とは関係が深いのである。さらに、後戸は本尊の裏に位置し、時には摩多羅神などの神仏が祀られるなど、宗教的な神秘性を帯びた場所でもあった。⁴³ 評定や僉議自体、多人数の意見や裏頭姿、変声、そして「王の舞」という清めの舞などによって神の影向する「無縁」の場所を作り出し、自らの意見を神慮たらしめんとする行為であるところから、後戸は評定に適した場所であったと言える。

こうして決定された「社僧」の意志は告文などによって表現されるが、応永二〇年八月日付の告文を調べてみると興味深いことが判明した。⁴⁷ この告文には「執筆中澤 祇園社々僧等告文案 応永廿八十二」という端裏書があり、連署している一七名の「社僧」の総意であることが判る。それが、永享三年八月一八日付の文書においてこの告文

は、「一社連署告文」と記されているのである。⁴⁸ つまり、「一社」とは、「社僧」の総体⁴⁹を表わす言葉であると考えられるのである。「社僧」は、それぞれが独立した経営体であると同時に、「一社」という一揆の形態も備えていたのである。

このように「社僧」は、公文所の役人や仏事の参勤といった祇園社内における役割を果たす存在であるとともに、個々の坊を持つなどの独立性を有しながら「一社」という惣的結合をもなしており、形態としては寺院における「寺家」に大変類似した公的とも言えるな存在であった。⁴⁹ しかし、実際には、「社僧」の総体を表わす言葉が「一社」であって、「寺家」と同義と思われる「社家」ではなかったり、2章でも触れたように、門弟として紀氏一族に従属しているなど、「社僧」は公的な存在とは言い難いのである。なぜこのようなことになったのだろうか。そこで、最後に「社僧」と紀氏一族の関わりを整理しながら、「社家」について考察することとしたい。

4 「社家」とその門閥形成

すでに指摘されているように、「社家記録」において「社家」は、多く執行と同義に使われている。⁵⁰ しかし、元々「社家」は祇園社においても、「寺家」のように政所や公文所を指す言葉であった。例えば、正中二年九月に作成された備後国小童保閑係の文書目録の中に、文暦二年正月一七日付の「社家下文」が挙がっているのだが、⁵¹ 実はこの下文の写が残っており、それを見ると「感神院政所下」の文言で始

まる「感神院政所下文」であつたのである。つまり、「社家」と「感神院政所」は置換可能な言葉であつたといえよう。では、なぜ「社家」は執行と同義になつていったのだろうか。そのためにはまず紀氏一族の台頭について考えなければならぬであろう。

紀氏一族の台頭の要因としてまず考えられることは、執行職の独占であろう。独占はすでに平安末期には始まつていたとされるが、その理由、経緯については不明である。ただ、紀氏一族は「社僧」と違ひ祠官職というものを持つてゐる。そして、紀氏一族が罪科を犯した時に召し放たれるのがこの祠官職であつたことからして、それが彼らの身分を保障するものであつたと考えられる。また、祠官とは神職を意味し、紀氏一族のみが祝祭として神事に参加することなどから、紀氏一族は神主的要素をも持つていたものと思われる。つまり、こうした差異が紀氏一族の執行職独占に繋がつたとは考えられないだろうか。

しかし、平安末期における祇園社の僧の僧位は、まだほとんどが大法師で、執行ですら他の僧と同じ大法師であり、1章で見たような階層差は見られない。そして、建治三年一二月に紀氏一族である円栄が法印に叙せられた時、「是當社々僧法印始也」と言われたように、紀氏一族も元々は社僧だつたと思われるのである。それが次第に紀氏一族だけ法眼、法印になり、突出していくことになる。それは、すでに指摘されている通り、御師の活動に起因するであろう。そして最終的には、紀氏一族の中でも特に顕深が足利義満の御師として所領を集積し、執行職を独占する宝寿院体制を作り上げていったのである。

しかし、そこにはこれまで見てきたように、「社僧」や専当・宮仕

を門弟や坊人として従属させる組織の門閥化という運動も同時に進行してしたのであり、それはすでに顕深の父顕詮の頃からすでに始まつていたのである。所領の支配や祈禱など公的な役割を持つ「社僧」や専当・宮仕を、門弟や坊人という私的な論理で身内に引き入れるということは、執行（宝寿院）が身内だけで社務を遂行できるということであり、それが例え將軍との個人的な関係であるはずの御師の活動によつて得られた私のものであつても、形式的にはあくまでも祇園社の所領支配であり祈禱であるということになるのである。それによつてこそ顕詮・顕深親子は、私的であるはずの御師という結びつきによつても、祇園社内において公的な「社家」として権力を持つことが出来たのである。つまり、執行（宝寿院）は顕詮・顕深の時代に、名実ともに祇園社を代表する「社家」になつたと言え、それによつて、結果的には祇園社の所領や組織は一元化されたのである。

おわりに

以上、「社僧」の再考を通じて、南北朝期から室町初期にかけて宝寿院が「社僧」を門弟にすることによつて門閥を形成し、自ら「社家」と名乗るようになったと結論づけた。

本論で行なつた「社僧」や「社家」の定義は、当然祇園社の、それに限られた時期のものに過ぎず、同じく宮寺と呼ばれる北野社や石清水八幡宮においては、全く違う存在形態が解明されつつある。しかし、いずれの神社でも社僧が將軍や天皇の御師たることによつて勢力

を伸ばしたという事実は大変興味深い。本論でも追究できなかった御師については、もう少し注目しなければならないだろう。御師の研究としては、伊勢や熊野の宿坊的な御師が有名であるため、御師⁽⁸⁾とその印象が強くなってしまうのだが、祇園・北野・石清水の御師のような祈禱師的な御師も存在するのであり、まずは多様な御師を分類することが必要と思われる。特に、祇園社のような京都に散在する社寺の場合、京都に住む人々が参詣しても宿坊を必要としないこともあり、その様な所では御師は何をするのか。そうしたことも合わせて、今後は、御師を通じて組織と信仰を絡めた研究をしていきたいと考えている。

註

- (1) 林屋辰三郎「祇園祭について」、『祇園祭』民科協会京都支部歴史部会 東京大学出版会 一九五三、脇田晴子「中世の祇園会」、『芸能史研究』第四号 一九六四
 - (2) 瀬田勝哉「中世の祇園御霊会」(同『洛中洛外の群像』平凡社 一九九四 初出は『日本史研究』第二〇〇号 一九七九「中世祇園会の一考察」、福原敏男「長者・旅所・政所」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第四七集 一九九三)
 - (3) 大山喬平「奈良坂・清水坂両宿非人抗争雑考」(『日本史研究』一九九号 一九七六、下坂守「中世非人の存在形態」(『芸能史研究』一〇号 一九九〇)
 - (4) 『神道史研究』第一八卷第二号、第三号 一九七〇(以下、特に断らない限り小杉氏の説を引用する場合は、この論考によっている。)
- また、ここでいう社内組織とは、別当、目代など山門系の上部組織を含めない狭義の社内組織のことである。

- (5) 延暦寺の祇園社支配機構については、注2瀬田論文、下坂守「山門公人の歴史的格」(『奈良史学』第二一号 一九九三、福眞陸城「祇園別当の成立と変遷」(『ヒストリア』第一五一号 一九九六)など参照。

- (6) 「社家記録」四 応安四年八月一日条

- (7) この表について一箇所だけ注記しておきたいことがある。それは、苅俊から晴厳までの初出が康永二年の一月一日になっているが、実はこの条には「先日烈参社僧六人」としか出てこない。しかし、ここに言う「先日」とは同月八日のことであるので、そこに出てくる「烈参今日六人」の名前を載せたのである。但し、八日条には、親尊、苅俊、頼承、幸誉、慶増、良晴の他に、苅俊、良晴のそれぞれの代として苅憲、晴厳を加えた八人の名が記されている。そして、親尊と頼承はそれ以前の記事に出てくるのでこのまともからははずしたのである。

- (8) この略系図は、川島敏郎「祇園社領「四力保」の形成と相伝について」(『古文書研究』第一四号 一九七九)所収の系図を参考にし、『早稲田大学所蔵 荻野研究室収集文書』一六〇号を使って一部改定し作図した。

- (9) 例えば、「社家記録」二 貞和六年正月一日条で、「坊人専当」として出てくる「朝田勾当」は、「社家記録」三 正平七年正月一日条では、「承仕」になっている。

- (10) 前掲注五 下坂氏論文

ちなみに、寄方が犬神人に対しても執行の命令を下達するとも説明されている。

- (11) 「中世東寺の寺官組織について」(『資料館紀要』第一三三号 一九八五)

- (12) 顕詮は「文書」下一七二六号、顕深は「文書」下一三八七号、顕増は「社家記録」一 康永二年八月四日条などによる。

- (13) 「文書」上八二二号

(14) 晴慶と顕豪の二人は図1の系図に出ていないが、晴慶は播磨の広峯社などの所領を晴喜から譲られているし（『文書』下一七九八号など）、顕豪も『文書』上一一一五号の大政所（祇園社の御旅所）別当職の相伝系図において顕詮・顕深の流れに入っていることなどから、両人も紀氏一族であると考えられる。

(15) 建長八年八月日付「感神院政所下文案」（『文書』下一四八一号）

(16) 年未詳「社僧某言上状案」（『祇園社記』続録第三（『記録』四 四一九頁））

(17) 康正三年五月一日付「斎藤基恒奉書案」（『文書』上一一〇六号）

(18) 「社家記録」三 正平七年四月七日条

この事件の関連記事は、同月一四日・五月六・七・八日条にもある。

(19) 「社家記録」三 正平七年正月一日条

(20) 「同」一 康永二年八月六日条に「公文所^{當時七人衆}」とあることから確認できる。

(21) 「文書」上一〇六二号

(22) 「同」三 正平七年一月九日条など。

(23) 建長八年八月日付「感神院政所下文案」（『文書』下一四八一号）

(24) 応永三〇年付「馬上役下行状写」（『祇園社記』続録第一（『記録』四一九五頁））

(25) 「社家記録」三 正平七年一月九日条

(26) 例えば、応永二年九月二〇日付「感神院政所返抄写」（『祇園社記』雑纂第八（『記録』四 一九八頁））など。

(27) 「社家記録」三 正平七年二月一日条 表1の慶増がそうである。

(28) 祇園社は、一応、神社であるので神事も行なわれたが、例えば、佛名神事のように経を読むなど、内容は仏事のものが多かった。しかし、この佛名神事では「社僧」は神前に供える檜（シキミ）を用意するだけで（観応元年一月二二日条）、紀氏一族だけが祝衆として神事に参加していた（同年二月一日条）。

(29) 「社家記録」三 正平七年四月八日条

(30) 例えば、「同」二 観応元年四月三〇日条には、顕詮が夏安居に結番している様子が記されている。

(31) 「社家記録」一 康永二年九月一日条

(32) 「社家記録」三 正平七年三月一日条

(33) 「社家記録」三 正平七年一月二六日条

(34) 例えば、文和二年七月五日付「室町幕府將軍家御判御教書写」（『祇園社記』続録第二（『記録』四 三三六頁））など。

(35) 「祇園社の御師」（『神道史研究』第一九卷第一号 一九七二）

(36) 年未詳「任宗奉書案」（『文書』下一四九八号）

角坊定朝が直接寄進を受けたのは、萱殿から寄進を受けていた祇園社大座神子松鶴女からであった（年未詳「摂津国金心寺相伝次第写」（『祇園社記』続録第九 『記録』四 五三三頁、貞和四年二月二九日付「松鶴女讓状案」（『文書』下一五〇一号））。

(37) 文和二年三月十日付「定朝讓状写」（『祇園社記』続録第九（『記録』四 五二六頁））

(38) 至徳三年六月十二日付「足利義満下知状案」（『文書』下一五〇九号）

(39) 「社家記録」四 応安四年七月一日条

(40) この争乱の経緯、また、山門使節や山徒については、下坂守「山門使節制度の成立と展開」（『史林』第五八巻第一号 一九七五）を参照。

(41) 「同」三 正平七年四月四日条

(42) 「同」三 正平七年四月五日条

(43) 「同」五 応安五年七月二二日条

この時は、経所の畳が盗まれる事件があり、それに山徒が関わっている疑いがあったため執行も加わったものと思われる。

(44) 黒田龍二「八坂神社の夏堂及び神子通夜所」（『日本建築学会計画系論文報告集』第三五三三三 一九八五）

(45) 山岸常人『中世寺院社会と仏堂』 塙書房 一九九〇

(46) 勝俣鎮夫『一揆 岩波新書 一九八二』、千々和到『中世民衆の世界の秩序と抵抗』（『講座 日本歴史』4 中世2 東京大学出版会

一九八五）、丹生谷哲一「鬼の呪力」（歴史を読みなおす『大仏と鬼』大隅和雄編 朝日新聞社 一九九四）

(47) 『文書』上二二三九号

(48) 『同』上二一四二号

(49) 寺家については、下坂守「中世大寺院における「寺家」の構造」

（『京都市歴史資料館紀要』第一〇号 一九九二）を参照。

(50) 前掲注二論文

(51) 正中二年九月日付「備後国小童保願詮所帯文書目録」（『文書』下一九五五号）

(52) 文暦二年正月一八（七の間違いカ）日付「感神院政所下文写」（『祇園社記』御神領部第十（『記録』三 五二二頁））

(53) 前掲注八論文

(54) 延文二年正月二二日付「天台座主尊道法親王令旨」（『文書』下一九六三号）など。

(55) 例えば、「杜家記録」五 応安五年九月一日条など。

(56) 保元三年四月五日付「感神院所司等解写」（『祇園社記』御神領部第二（『記録』三 三八六頁））、寿永三年三月日付「感神院所司等解写」

（『祇園社記』雜纂第八（『記録』四 一八三頁））

(57) （建治三年二月）「當社々僧依大功蒙勸賞例」（『祇園社記』雜纂第三（『記録』四 一〇四頁））

(58) 文暦二年正月一八日付「感神院政所下文写」（『祇園社記』御神領部第十（『記録』三 五二二頁））、弘安元年五月日付「感神院政所下文写」（『祇園社記』御神領部第十一（『記録』三 五四三頁））

(59) 北野社は、鍋田英水子「中世後期「北野社」神社組織における「一社」（『武蔵大学人文学会雑誌』第二九卷 第一・二号 一九九七）ちなみに、本論の構想は鍋田論文から多大な影響を受けている。石清水は最近のものではないが、伊藤清郎「中世前期における石清水八幡宮の権力と機構」（『文化』第四〇巻 第一・二号 一九七六）など。

(60) 例えば、西山克『道者と地下人』（吉川弘文館 一九八七）宮家準編

『熊野信仰』（民衆宗教史叢書第二十一卷 雄山閣出版 一九九〇）など。

（のち ひでとし

文学研究科日本史学専攻博士後期課程）

一九九七年一〇月一六日受理

表1 『八坂神社記録』、『八坂神社文書』に見える「社僧」と呼ばれる僧（中世）

	坊名	国名	役名	僧位	三綱	公文	称号	社僧と呼ばれる初出	備考
最円								貞応2 (3-187)	
仁増								貞永2・正・3 (4-378)	
頼祐				大法師				〃	
慶円								〃	
長円								建長8・8・ (4-93)	
親尊		大進	権別当					康永2・7・23 (1-11)	
聖円		備前			都維那			〃	
頼承		遠江	権大別当				阿闍梨	〃	
苅俊			権大別当					康永2・11・11 (1-70)	
苅憲		長門	権大別当					〃	父苅俊
幸登		輔	権大別当				阿闍梨	〃	父幸有
慶増		伯耆	少別当					〃	静晴門弟、律師
良晴			少別当					〃	
晴殿		卿	権別当			四公文	阿闍梨	〃	父良晴、顯詮門弟
円朝		上野					阿闍梨	康永2・12・27 (1-89)	執行(静晴)弟子
		侍従	権別当					康永3・5・1 (3-101)	親曉 <small>ゝ</small> (1-41)
幸円		大輔	権別当				阿闍梨	正平7・4・7 (1-239)	
仙舜		治部		法橋	都維那	二公文		〃 (1-240)	顯詮門弟
幸兼		若狭		法眼				〃	
円範				法眼				〃	
定尊		下野	権別当					〃	
幸有		大和	権大別当				阿闍梨	正平7・7・3 (1-266)	別当代、目代々
定栄	角坊	安芸	権別当	大法師			阿闍梨	貞治6・7・28 (3-472)	父定朝
元怡		式部	権大別当					応安4・8・19 (1-357)	
能禅			権別当	大法師				永徳元・12・18 (3-290)	
深栄	角坊	安芸	権別当	法眼			阿闍梨	至徳3・6・12 (3-472)	
縁栄		伊豆	権別当					年未詳 (4-105)	
幸慶	鳥坊	三位	権大別当					〃	
		加賀							
恵俊	蔵坊	筑前	少別当	法師			阿闍梨	〃	
		大進	権大別当					〃	竹坊に居住
苅山 (仙)	栗木坊							応永20・8・ (3-297)	
慶秀								〃	
快秀		伊与	少別当					〃	
詮秀 (増)			少別当	大法師	寺主			〃	
快増		山城	少別当	法師			阿闍梨	〃	
深慶	竹坊	常陸	権大別当					〃	
	鳥居坊								
賢全			権大別当	大法師				〃	
永秀								〃	
幸舜			権大別当	大法師				〃	
快尊		三河		法橋	都維那	二公文		〃	
深範					都維那			〃	
深勝				法眼	上座			〃	
深応			権別当					〃	
深玄							阿闍梨	〃	
深栄							阿闍梨	〃	
快賢		越中		法眼	上座	一公文		〃	
春照		丹後		法橋		三公文		文安元・6・ (4-105)	別当代官
快祐		駿河	少別当					文安6・5・22(上-799)	
栄秀		但馬		法橋	権寺主			年未詳 (4-433)	

※初出の（ ）内は、例えば、（3-187）であれば『八坂神社記録』（『増補 続史料大成』）第3巻の187頁ということを表わす。（上）は『八坂神社文書』の上巻ということである。

※
は、執行になつた者を表わす。

は、父子関係が明らかでないことを表わす。



